

巻 頭 言

第 55 回日本呼吸器学会学術講演会開催にあたって
呼吸器病学の未来を射抜く—多様性から個別化医療へ—

Pursuing the Future of Respiriology — New Paradigm of Diversity and Personalization —

会長挨拶 木村 弘

President: Hiroshi Kimura

この度、平成 27 (2015) 年 4 月 17 日から 19 日までの 3 日間、東京国際フォーラムにおきまして第 55 回日本呼吸器学会学術講演会を開催させていただくことになりました。本学会の開催を奈良県立医科大学で担当させていただきますのは、当教室の宝来善次初代教授が昭和 38 (1963) 年に第 3 回日本胸部疾患学会を大阪で開催されて以来のことで、実に 52 年ぶりとなります。伝統ある本学会を開催させていただく機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。

今回の学術講演会は「呼吸器病学の未来を射抜く—多様性から個別化医療へ—」(Pursuing the Future of Respiriology—New Paradigm of Diversity and Personalization—)をテーマといたしました。私は学生時代に弓道三段の段位をいただきましたが、弓道部の学生さんが東大寺大仏殿の前で弓を射る姿を学会ポスターにと願っていました。そしてできあがった写真を見つめながら思いついたのがこのテーマ「呼吸器病学の未来を射抜く」です。“—多様性から個別化医療へ—”はまさに、今、本学会が求められている医学・医療の流れであると考えています。

日本呼吸器学会は呼吸器病学の進歩・普及を目的として、昭和 36 (1961) 年に日本胸部疾患学会として発足しました。その後平成 9 (1997) 年には現在の日本呼吸器学会に名称変更となっています。現在、本学会の会員数は 11,500 人に及び、呼吸器領域ではわが国最大の学術団体として発展しています。その一方で、わ

が国においては呼吸器専門医が、消化器専門医や循環器専門医と比べて圧倒的に少ない現状がまだにあります。医療現場、社会が呼吸器科医の増加に対して大きな期待感を有しているのも事実です。われわれは次世代の医療を担う若い医師、医学生に対して、呼吸器疾患、呼吸器病学における魅力ある展開を示す必要があります。学術講演会においては「日本呼吸器学会の学術戦略の展望」、「本学会の将来展望—男女共同参画、呼吸器科医師増加策、学術活性化の取り組み」等を特別企画として、学会員の皆様とともに考え討論できる機会を設けたいと思います。

さて、本学会が発足した時代背景を探ると、戦前戦後を通して、「不治の病」、「国民病」と呼ばれ、わが国における死亡順位のトップを占め恐れられてきた結核との戦いを抜きにしては語れません。昭和 26 年には結核予防法が全面改正になり、結核の撲滅にむけた取り組みの中で、その 10 年後の昭和 36 年にそれまでの日本結核病学会と並んで日本呼吸器学会が設立されたわけです。この歴史は、結核にとどまらず、当時、慢性気管支炎、肺気腫と呼ばれた慢性閉塞性肺疾患 (COPD)、気管支喘息、肺がんなどの非結核性呼吸器疾患の重要性が、医学的にも社会的にも広く認識されてきたことを物語っています。これらの疾患はたばこや大気汚染とも関連することが明らかになり、診療の軸足を、広く呼吸器疾患全般に向けるべき社会的ニーズが年を追うごとに高まってきたといえます。WHO の全世界における死亡予測では、2020 年には、上位 10 位までの疾患に「COPD」、「肺炎」、「肺がん」、「結核」が入っており、呼吸器疾患の重要性は世界的に見ても疑う余地はありません。

第 55 回日本呼吸器学会学術講演会会長

奈良県立医科大学内科学第二講座・大学院医学研究
科呼吸器病態制御医学

肺においては、その構成細胞の多彩さ、複雑さは、他の臓器と比較しても際立っています。また、ガス交換臓器としてのみならず、さまざまな生体物質の活性化、不活化の役割も担っています。このような構造、機能の多様性からも想定されるように、基礎研究としての分子機構面からのアプローチ、そしてその成果の臨床応用は、循環器疾患をはじめとする他領域と比べ立ち遅れていました。しかし、近年では、肺がんに対する分子標的治療をはじめ、肺高血圧症や間質性肺疾患/肺線維症における分子機構からの病態解析の進歩はめまぐるしいものがあり、それらの基礎的知見が臨床分野に新しい展開をもたらしています。特にこの5、6年は、基礎研究の成果が新たな治療法の開発として、多くの患者に対して確実にフィードバックをもたらしています。例えば、肺がんや肺高血圧などでは、10年前では考えられなかったような明らかな予後の改善が現実となっています。

本学会では、ご参加いただく先生方、とりわけ、研修医を含めた若い先生方から、専門医を目指している先生方に、呼吸器病学のグローバル化を感じとっていただきたいと考えました。そのために、極力、海外から招く多くの先生方に接していただける機会を増やすことを目指したプログラムを企画しました。海外からは教授クラスの先生だけでも約35名の方々に講演をいただきます。

基調講演は、IL-8やMCAF/MCP-1を世界に先駆けてクローニングし、その生物学的意義を見いだした東京大学分子予防医学の松島綱治教授に「線維症の分子・細胞基盤」というタイトルでお願いしました。肺線維症を中心に、社会的背景から線維症の細胞・分子機序、炎症の慢性化基盤、治療・予防にまで、参加者にとって魅力的なご講演をいただけるものと思います。また、特別講演としましては、弦間昭彦教授、長谷川好規教授、平田一人教授、藤田次郎教授、とそれぞれの専門分野で活躍されておられる先生方からご講演いただくことにしました。招請講演としては、国際

的観点から、各専門分野の第一人者の先生方をお招きしました。COPD分野ではAugustine M. K. Choi教授、睡眠分野ではKingman P. Strohl教授、肺循環分野ではNobert F. Voelkel教授、喘息分野ではPeter J. Barnes教授の各先生方です。なお、会長講演としては「呼吸器と全身のクロストーク」のタイトルで講演の予定です。

他に、international symposiumとして、COPD, lung cancer, interstitial lung disease, sleep apnea, pulmonary hypertensionの5つのテーマを取り上げ、米国(American Thoracic Society)、欧州(European Respiratory Society)、環太平洋(Asia Pacific Society of Respirology)からの代表的演者、および本学会会員による講演・討議が行われます。

さらに特別企画シンポジウムとして、cross-talk between respiration and circulation in sleep apnea(日本循環器病学会との共同企画)、pulmonary hypertension—comprehensive update—, recent advances in multidimensional research of COPDをテーマに、諸外国の第一人者をまじえたpresidential symposiumも予定しています。また、各学術部会の企画によるシンポジウム、教育プログラムとしての教育講演や症例検討会、聴診・画像の呼吸器診療スキルアップセミナー、関連学会との共同企画、特別企画等、盛りだくさんの内容になっています。

最終日の午後には、市民と医療者のための公開講座として、「こころとサイエンス」と題して、臨済宗妙心寺派妙心寺前管長・日本仏教会元会長・花園大学元学長の河野太通老大師から「豊かなるもの」、理化学研究所特別顧問の谷口克先生から「アレルギーは文明病か」のタイトルでご講演をいただくことになっております。

“呼吸器病学の未来を射抜く”とともに、皆様の心に残る楽しい学術集会となるよう、現在、教室員が一丸となり、関係者とともに準備に取り組んでおります。学会会員の皆様とともに、多くの方々にご参加いただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。